【ポスター発表】

学生による児童虐待防止運動の取り組みについての一考察

ーオレンジリボン運動から学生が学べたものー

○　佐野日本大学短期大学　　大熊　信成（会員番号 002888）

キーワード：児童虐待・オレンジリボン運動・スーパービジョン

１．研 究 目 的

周知のように、近年、児童虐待が深刻な社会問題となっており、21 世紀を担う児童にきわめて大きな影を落としている。全国の児童相談所における児童虐待に関する相談対応件数も増加を続け、依然として、社会全体で早急に取り組むべき重要な課題となっている。そのようなことに鑑み、2004（平成 16 年）度から児童虐待防止法が施行された 11 月を「児童虐待防止推進月間」と位置づけ、児童虐待問題に対する社会的関心の喚起を図るため、集中的な広報・啓発活動を実施しており、オレンジリボン運動として、児童虐待の現状を広く知らせ、児童虐待を防止し、虐待を受けた児童が幸福になれるように、という願いから民間団体、地方公共団体、国が連携し、一体となってオレンジリボンキャンペーンを展開し、社会全体として児童虐待を防止する機運を高めることとした。筆者は大学の講義の折に現代の児童を取り巻く現状を訴え、何か私たちにできることはないかということを学生と共に考えてきた。そのようなときに「大学」と「道の駅」の交流・連携の一環として、佐野日本大学短期大学と道の駅「どまんなかたぬま」及び宇都宮国道事務所 3 者で連携企画型の実習を実施することになり、企画立案をすることになった。この取り組みは、「将来の地域活性化の担い手となる人材を育成・確保するとともに、「道の駅」が地域活性化の拠点を目指して進化を遂げるため、「道の駅」と大学がお互いのニーズを確認し、付加価値を創出する企画・立案等を実施するもの」となっている。そこで道の駅「どまんなかたぬま」において「学生によるオレンジリボン運動」のイベントを企画するに至った。「子育てにやさしい社会の構築」を願い、この運動の契機となった栃木県でこのオレンジリボン運動を学生とともに発信していくことに意味があるとし、2015（平成 27）年より、具体的な実践活動を毎年行っている。この 4 年間の取り組みを学生の学びの視点から考察する。

２．研究の視点および方法

オレンジリボン運動を展開するにあたり、学生が工夫した点として、

・手作りオレンジリボンを 500 個作成した。・作業風景を写真に撮り、それをコルクボードに貼り現場に提示した。・「子どもを守ろう！メッセージ大募集」のワークショップを行い、来場者に折り紙で折ったリボンにメッセージを書いていただき大きなオレンジリボンのモチーフを作成した。・リボンは紫外線硬化樹脂を塗り、ＵＶライトをあてて耐久性をアップした。・楽しさ、明るさを出すためオープニングセレモニーを実施し、子どもたちが楽しめ

るように手話歌、手遊び歌を披露した。・ご当地キャラクター（さのまる）を起用したＰＲを実施した。・啓発カードを同封して189の直通ダイヤルの周知を徹底した。・一人でも多くの方に知っていただくためにメディアを最大限に活用した。（下野新聞・読売新聞・東京新聞に掲載された。またとちぎテレビのニュースで紹介された。）などである。

３．倫理的配慮

学生には、改めて研究目的、方法、録画・録音の承諾、データの公表について文書と口頭にて説明し、「調査・実験参加に関する同意書」及び「個人情報の利用に関する同意書」の２通を渡し、それぞれ同意書への署名と捺印をいただいた。同意書は申請者の研究室の鍵のかかる机の引き出しに保管している。個人情報には十分注意を払い、特定されることのないよう配慮した。また、学会にて発表することを口頭で伝え了承を得た。本研究は「日本社会福祉学会研究倫理規程」を遵守し配慮した。

４．研 究 結 果

オレンジリボン運動が終了し、その後教室内においてスーパービジョン・振り返りを行った。プロセスレコードも取り入れたＫＪ法とブレーンストーミング法による特性要因図作成ではピアグループスーパービジョンによりケースを多面的に検討することがでた。

５．考 察

筆者は、オレンジリボン運動を展開しているときも、また教室内の振り返りのスーパービジョンにおいても「このグループでアイデアを出し合い、子どもたちの権利について考えていきたい」ことを宣言し、ピアグループスーパービジョン（同僚間スーパービジョン）に焦点をあててきた。それを試みたことにより、その後のスーパービジョンにおいてメンバー間での経験を共有し、それぞれのメンバーの能力を認め合い、相互利用することが伺えた。またプロセスレコードも用いたＫＪ法による特性要因図作成ではピアグループスーパービジョンによりケースを多面的に検討することができ、メンバーに支えられ、自身が成長した過程が伺えた。このように短期的な実践活動においては学生の振り返りにおけるピアグループスーパービジョンの活用が効果的であるといえるだろう。

学生の手による「厚生労働省（虐待防止）」、「国土交通省（道の駅）」、「文部科学省（学生）」の３省にまたがる事業の展開は、全国でも初と思われる。将来、ワーカーとなる学生達はこの運動を通して、ただ単にイベントを楽しむだけではなく、児童虐待防止運動に自発的に取り組むことが出来たようである。学生たちは、子どもたちが子どもたちらしく自分の未来を築けていける社会になることを体感的に理解しようとしていることがうかがえた。今後もこの活動を継続したいと思っている。